

チェックテスト 解答

4章 諸理論と作業

1 健康促進に向けた作業の活用～作業科学の観点から～ (p.234)

①

作業療法士が作業を活用する理由は、作業がきわめて大きな影響力をもっているからである。人間が日常生活において作業をすることは、広範囲に、複雑な現象につながりながら、心身機能は元より、例えば技能、自信、意欲、考え方、満足感、楽しさ、希望、生活時間、報酬、社会とのつながり、さらに家族や社会といった環境にまでも影響を与えていく可能性をもっているのである。

②

日常的に行うすべての作業に及ぶため、作業療法室のみに留まらず、病棟、施設、自宅、地域など、広範囲である。また場所が広範囲になることに伴い、作業を行う時間が、作業療法の時間だけでなく、日常生活 24 時間すべてに広がることになる。

③

働くことかつ体調管理へのニーズのある対象者へ、健康促進に向けて「働くこと」を活用するためには、例えば働くことが健康促進につながることに對して、何が、どのように関連しているのかについての知識が必要となる。意味、エネルギー管理、満足感、休息、自己選択、環境などと働くこととの関係について理解を深めることなどにより、作業療法士が、対象者が健康促進に向けて働くことを支援するために、何に着目し、どのように支援できるのかについての情報を得ることが可能となる。

④

意味を反映する作業選択とは、文化的に名づけられた名前、つまり内容だけの選択ではない。「どこで」、「いつ」、「誰と」などの、場所、時間、頻度、物、ともに行う人など、環境条件や行い方の選択が、個人的な意味を作業に反映することにつながる。

2 人間作業モデルと作業 (p.244)

①

キールホフナーら

②

仕事・遊び・日常生活活動

③

意志・習慣化・遂行能力

④

個人的原因帰属・価値・興味

⑤

習慣・役割

⑥

客観的構成要素・主観的経験

⑦

物理的環境・社会的環境

⑧

空間・対象物

⑨

社会集団・作業形態

⑩

作業参加・作業遂行・作業技能

⑪

作業有能性・作業同一性

⑫

(推論例)「旅行に行きたい」という語りの内容から、旅行に行くことが意志(価値・興味)に該当する情報であると考えられる。さらに「夫と」という社会的環境が条件とな

っていることに着目する。また「昔のように」という語りから旅行に行くことが対象者のこれまでの生活のなかで習慣となっていたと推論できるかもしれない。

3 精神分析と作業 (p.259)

①

局所論, 構造論, 経済論, 力動論, 適応論, 発達論の6つの理論がある。

②

p.255, 「表4 精神分析的視点による活動分析」を参照のこと。

③

①依存欲求や自己愛を充足する, ②他者への陽性感情を育む。

④

①依存欲求の適応的充足, ②衝動性のコントロール。

⑤

作業活動を介する, 参加の時間, 頻度, 治療者の態度。

⑥

作業療法士は, 患者の理想化や価値下げの原因を自分の治療的かかわりに関連づけて考え, 過剰に万能感や罪悪感を抱きがちである。しかし, 実際は作業療法場面だけの影響とは考えにくく, 生活歴から見えてくる固着点や解消されていない葛藤を吟味すること, また作業療法士自身の逆転移を洞察して, 治療環境を見直すことが必要である。

4 認知行動療法と作業 (p.273)

①

行動療法と認知療法

②

①認知, ②行動, ③感情や気分, ④身体的反応

③

意識, 自動思考, スキーマ

④

強い情動(感情や気分)の存在

⑤

選択的抽象化, 恣意的推論, 過剰な一般化, 拡大解釈と過小評価, 自己関連付け, 完全主義的(すべき, 全か無か, 二分法的)思考

⑥

・ブレインストーミングや好奇心と知的欲求を刺激するような質問をし, 非適応的思考の認識とその変化を手助けする。

・そのセッションの流れや内容に関して, 物語やストーリーを作りながら質問していくことが重要であり, そのためには治療のポイントや方向性を台本のように考えておく必要がある。

⑦

・認知行動療法の最も新しい技法であり, 認知を修正して行動への変化を目指すというより, マインドフルネスな状態を目指す。

・マインドフルネスな状態を目指し, 自身をマインドフルネスな状態に置くことで, 認知的

・行動的な治療技法をより効果のあるものにしていく技法であり, また, マインドフルネスそのものの効果を狙った技法でもある。

・マインドフルネスは治療法であると同時に治療目標でもあり, 介入手段であると同時に介入結果である。

⑧

①普遍性, ②病気のノーマライジング, ③参加者同士の援助, ④他の人から対処のための手法を学べること, ⑤治療へのアドヒアランスの改善

⑨

生活における体験(他の人とのかかわり, 問

題に対処すること、活動を楽しむこと、自分の目的達成のために計画に取り組むこと)に意義を見出すこと。

⑩

①自分でできる、②他の人のやり方をみる、③言葉での説得、励まし、④ポジティブな感情がわき起こる

⑪

①生活の中の一出来事から、認知、行動、その時の感情、身体的変化の4つの枠組みだけで状況とその対処方法の多くが整理可能となる。またセッションを繰り返せば患者の生活がより見えてくる。日々の生活の結果である人生は作業そのものであり、それに意義を見出すことは作業療法そのものであると考えている。つまり、認知行動療法を通して作業を整理しているのである。逆にいえば、認知行動療法は漠然とした作業を仕分けして整理する視点や枠組みを与えてくれている。

②精神科医のライトらの「長期治療においては、生活における体験(他の人とのかかわり、問題に対処すること、活動を楽しむこと、自分の目的達成のために計画に取り組むこと)に意義を見出すことができ、これを達成することは意味のある長期目標である。」

5 感覚統合と作業 (p.287)

①

アメリカの作業療法士エアーズ (Ayres AJ) が学習障害の理解とその治療のために、理論をまとめたものである。

②

学習障害、自閉症スペクトラム障害、注意欠如・多動症などの発達障害の治療として用いられているが、そればかりではなく理論は発達全般に応用できるものである。

③

調整機能とは、同じ体験をしたとしても感覚刺激の感じ方が個々により異なるということである。脳が情報処理しやすいように調整される機能といえる。

④

視覚刺激、聴覚刺激、固有受容覚刺激、前庭覚刺激、触覚刺激

⑤

感覚統合の発達モデルは、各感覚機能を積み木の土台として配置し、その上に積み上げられた積み木が、姿勢、身体の使い方、手の使い方、認知機能に影響して、最終的には言葉の獲得や、コミュニケーション、情動に影響することを意味している。重要なことは積み木で構成されているところである。例えば土台にある触覚機能に問題があれば、その上の積み木も崩れてしまい、最終的には言葉の獲得や情動などにも影響するというものである。「つるつる」「ザラザラ」などは実際に触れてみることで刺激を受容できる。その際に周囲から「つるつる」「ザラザラ」と言われることで、言葉としての学習が進む。

⑥

視覚機能、聴覚機能ともに図地弁別機能に問題を抱えることで、注意障害につながることもある。図地弁別機能は本来見ようとするもの、聞こうとするものに注意が向くことによりその周囲の視覚刺激や聴覚刺激が抑制されるものであるが、この図地弁別機能に問題があると、周囲の刺激も抑制されずに同じような刺激として影響を受けることになり、結果として、注意散漫な状態になってしまう。

⑦

視覚機能には、識別機能として時間をかけて見ることで知覚認知できる機能がある。それ

に対して、より動物的な機能である自分自身の身を守る機能として防衛的な機能がある。これは視野に入ってきた動く対象に対して瞬時に注意を向けて反対方向に身を移動する機能といえる。これは無意識に出現する機能である。この機能が優位に働くと、視野に入ってきたすべての動く対象に注意が向いてしまうことから、注意集中が困難になったり、周囲からは落ち着きがないと思われたりすることがある。

⑧

聴覚機能には識別機能として、時間をかけて聞くことで知覚認知できる機能がある。それに対して、より動物的な機能として、自分自身の身を守るための防衛的な機能がある。これは、持続的に聞こえている音以外に聞こえてきた音に対して、瞬時に注意を向けて反対方向に身を移動する機能といえる。これは無意識に出現する機能である。この機能が優位に働くと、聴覚刺激として新たに聞こえてきた音すべてに注意が向いてしまうことから、注意集中が困難になったり、周囲からは落ち着きがないと思われたりすることがある。

⑨

固有受容覚機能は、筋の物理的な長さの変化と筋の収縮力を刺激として脳へ伝える役割をもっている。その結果、自分自身の体の動きや力加減を知ることができる。適応行動としての力加減は無意識に働く機能である。

⑩

前庭覚機能は、地球上の重力との関係で受容する刺激といえる。姿勢筋緊張、眼球運動、情動、言葉の学習などに影響する。

⑪

触覚機能は、身体図式の獲得に影響しているが、それに加えて運動企画能力にも影響する。

また情動のコントロールとも密接に関係している。

⑫

感覚統合療法として用いることのできる遊びには砂遊び、ブランコ、ジャングルジムのような公園にあるものから、スクーターボード、ハンモック、ボルスタースウィング、フレキサースウィングなど感覚統合療法のためにつくられた遊具などがある。

6 カナダモデルと作業 (p.295)

①

クライアントと作業

②

人・作業・環境

③

専門職とクライアントはお互いが対等な立場で、パートナーとして治療をともに行うこと

④

主観的評価

⑤

作業の遂行度と満足度

7 MTDLP (生活行為向上マネジメント) と作業 (p.301)

①

セルフケア、家事、仕事、余暇、地域活動

②

作業療法は、人々の健康と幸福を促進するために、医療、保健、福祉、教育、職業などの領域で行われる、作業に焦点を当てた治療、指導、援助である。作業とは、対象となる人々にとって目的や価値をもつ生活行為を指す。

③

生活行為目標の合意形成が可能な場合。

④

本人，家族への聴き取り。対象者がどのような生活行為を実行したいかを聴取。

⑤

生活行為の自己評価として，実行度と満足度について1～10点で答えてもらう。

⑥

「心身機能・身体構造」「活動」「参加」

⑦

「環境因子」「個人因子」